

## 次世代につなぐ、日台交流

こしのみつひろ  
**越野充博** ● 本会理事  
J E T 日本語学校理事



小学校の同級生に廖経堂くんという子がいた。ちょうど巨人軍が台湾キャンプを行った頃。足が速く、左利きで野球もうまかったのである。みんなが「やっぱり台湾は、王選手の国だからなあ」と拍手喝采だった。

私の父は、戦時中は近衛連隊に所属した人だが、A B C D包囲網により日本を戦争に追い込んだ欧米を恨み、火事場泥棒のようなソ連を痛烈に批判する一方、蒋介石の「以德報怨」のふるまいには感謝し、私たち息子にも、日本人として彼への恩義を忘れてはならないと語りかける、どこにでもいる市井の保守派だった。

ご指摘を待つまでもなく、これらのエピソードにいくつかの事実誤認があることは承知しているが、ひとつひとつの積み重ねが、私の心の

中にある台湾のイメージをとてもよいものにしていったことは事実なのである。

しかしそれから三十年近く、私にとって台湾は縁遠い所になっていた。国交が断絶し、メディアで取り上げられることといえば議会の殴り合いくらい。スポーツ大会でも台湾の呼称はなく、子供の頃、大好物だった台湾バナナもフィリピン産に押され、店頭から姿を消していた。

やがて私も三十代後半になり、東京青年会議所(J C)等の社会活動を通じて、再び台湾に出会い、交流に深く関わるようになった。

当時の東京J Cは、国交回復以前から中国共産党全青連と交流し、友好に大きく寄与してきたという自負があり「日中友好」に熱心で、必然的に台湾との二国間交流は、ほとんどのチャ

ンネルで途絶えた状態だった。

仲間の高木啓君（現東京都議会議員）の縁で、地元、東京都北区で日本語学校を経営されている金美齡先生、周英明先生から親しくご指導をいただくことになったのもこの頃からである。

折しも台湾では、再選された李登輝総統がさらなる民主化を推し進めていた。

「中国との交流が悪いわけではない。しかし、その継続の妨げになるという理由だけで、東京JICの一員として、名実ともに民主国家となった台湾のJICと交流できないのはおかしい」と主張した委員長（つばきくにじ）の椿邦司君（現北区議会議員）以下私たち東京JIC北区委員会メンバーは、一九九九年九月に起きた台湾大地震の義捐活動に協力する一方、年末には、台北JICとの交流事業を敢行し、さらには総統選挙の最中、民進党本部にて陳水扁候補（当時）との会談を実現したのだった。

二〇〇九年九月、東京JICは李登輝先生をお招きし、新日本創生フォーラムを開催したが、十年前の紆余曲折を想い、北区の仲間一同感慨

深いものがあつたことはいうまでもない。

さて、世界一の親日国・台湾を支える日本語世代も、「絶滅寸前」（ご自身たち曰く）といわれる。考えてみれば、この皆さんと私たちの父母世代は同じ教育を受けた、いわば「兄弟」だったのではないかと思う。兄を慕う弟でなければ、国交断絶といった仕打ちを経て、なおかつ親しく思ってくれるとは考えられない。

一方、時を経て、私たち世代の関係を譬えるなら「いとこ」だろう。親戚でも、「いとこ」となるとお互いの親しくなる努力や尊敬がなければ、良い関係が続けることはできないではないか。もう私たちは、胸を締め付けられるような日本語世代への郷愁と思慕の情に甘えてはいられない。

海洋民主国家同士、台湾と真のパートナーシップを築くという日本人としての強い意思を持ち、前向きで聡明な台湾の人たちと交流していくことこそが、現在そして次世代の日本の国益、日台共栄、東アジアの平和秩序の維持にとって最も重要なことだと私は固く信じている。